インドネシアの教育制度と社会科教育

Juhana Supriadi Mariadinata

(白坂 蕃 訳)

I. はじめに

1982年、筆者は日本の教育制度やその内容を研究するために来日した。来日してみると、インドネシア共和国の教育の基本理念、学制などが余り知られていないことに気がついた。幸い、1983年4月から東京学芸大学大学院に籍を置くことになり、周囲の勧めもあり、本稿を著すことにした。

本稿はインドネシアの学制、教育の内容などについての概観であるが、日本におけるインドネシアの理解に少しでも資することができれば幸いである。

II. 教育システムの概観

他の国々においても同様であろうが、インドネシアにおいてもまた、教育というものは、国家として育てらるべき主要で、そして重要なものである。過去から現在まで、教育は国民をつくりあげてゆくためには重要な活動である。

インドネシアでもまた、国の歴史、国民、宗教などの講義のための教科書は、古代から現代まで続けられてきた教育についての知見にふれている。外国の勢力がインドネシアに到来する以前、また、ヒンドゥーの文化導入を含めて外国の文化がインドネシアに導入される以前には、インドネシアの教育は“パデポカン”(Padepokan)と呼ばれる簡単な学校で行われた。パデポカンとは古い学校で、小規模であり、寺院そのものが学校の機能を果たしていた学校を意味する。パデポカンは多くの知識を与えた特別な学校で、一般の人々には閉ざされていた。したがって、パデポカンの時代は、教育は一般的なものではなく、インドからヒンドゥーや仏教の文化が導入されてはじめて、インドネシアの教育は発展した。このことは他の分野について

も同様である。

ヒンドゥー教や仏教の導入後、教育の中心は“プーラ”(Pura)すなわち寺院となった。プーラにおいて学生は、多くの知識を学ぶことができた。しかしながら、プーラにおける教育の中心は、宗教的なものであり、社会に対する知識や技術についての教育はほとんどなかった。

プーラは僧職につく人々の教育に主な目的があった。しかしプーラは各学校毎に独立したもので、各学校はシステム、カリキュラムを独自につくり、統一性がなかった。このプーラのシステムはインドネシア全土に広がっていたが、そこにはヒンドゥー教と仏教の両方のシステムが存在していた。このプーラのシステムは、ジャワ、スマトラ、カリマンタンなどの内陸部にまで浸透した。したがって、インドネシアには沢山の島々があるにもかかわらずどこにでも、ヒンドゥー教や仏教にもとづく石像、習慣、文字などが今でも残存している。

15世紀にイスラム教とその文化が入ってくると、プーラによる教育システムは壊された。最初、インドのグジャラ(Gujarat)の商人によって、スマトラ北部のアチェ(Acheh)に持ち込まれたイスラム教は、徐々に浸透し、ヒンドゥー教と仏教の文化にとってかわっていった。しかし、こんにちでもインドネシア全域にヒンドゥーと仏教の文化、すなわち習慣や生活様式が残されている。

イスラム教がインドネシアに入ってきて、それまでのヒンドゥーや仏教の文化と混合し、新しい文化が生れた。宗教そのものはイスラム教となったが、従来の伝統的文化や習慣は変化しなかった。

イスラム教の導入以後、教育の中心はパサントゥレン(Pesantren)となった。パサントゥレンとは寺院に附属してつくられた学校であり、これもまた全国いたるところに普及した。イスラム教

の中心となったのは、例えば東北スマトラのアチエ、ジャワ北東部のバントゥン (Banten)、同じジャワ東部の グレシク (Gresik)、ロンボック島、ジョグジャカルタ (Jogjakarta) などであった。これらの中心からインドネシア全国にこのパサントゥレンが拡大していった。そして最も重要なことは、このパサントゥレンがこんにちのインドネシアの教育システムの基礎になっていることである。

初期には、このパサントゥレンはひじょうに簡単な組織であった。すなわちひとつのパサントゥレンには、教師はひとりであり、この教師はイスラム教の僧であった。この教師と僧を兼ねた人物は、アジェガン (Ajengan) またはキアイ (Kyai) と呼ばれた。彼は2つの機能を持っていた。つまり、ひとつはイスラム教の教義に基づいた国民全体への教育であり、もうひとつは特別な人々にコーラン (Koran) とハディツ (Hadits) を教えることであった。後者は読み書きができ、コーランやハディツを教授でき、さらにイスラム教の教義に基づいた行動のできるイスラムの僧をつくることであった。こうして育成された僧はイスラムの祝祭日や結婚式などで活動することになった。教育はモスクまたはキアイの家で行われた。

このようにキアイというのは、国民の総監督とでもいうべきものであった。パサントゥレンの生徒はサントウリ (Santri)、またはチャントウリック (Cantrik) と呼ばれた。サントウリとかチャントウリックというのは、普通の学校ではなくて、パサントゥレンで学んでいる子どもたちを意味する。このパサントゥレンは、現在でもひとつの学校として、次に紹介するようなレベルと教育内容を持って存在している¹⁾。

パサントゥレンの各レベルと教育内容

a) the basic level

アラビア文字、コーランについての若干の学習、祈りのセレモニーの仕方、若干のイスラムの生活や社会関係、イスラム教に基づいた行動の様式 (a good spirit practice, 例えば、人に贈りものをするときには左手でなく、右手を使うことなど)。

b) the second level

前の basic level よりも内容が広く、深くなる。このクラスで生徒は祈りの方法やその意味を理解する。

c) the upper level

当然、このクラスの内容は second level より内容が広く、深くなる。イスラム教の特色と性格、世界におけるイスラム教の発展、アラブ諸国についての知識、イスラム教の法律、祈り、コーランの読み・書き、コーランの暗誦、社会的知識、モハメッドの教えに従うことの意義、現世の理解だけでなく、死後の世界への理解を深めること、善良な心の育成。上記の内容には、世界における人間としての行動・スポーツ・技術なども含んでいる。

d) the top level

これは、イスラム教を布教し、社会のリーダーとなるような僧を育成するコースである。このレベルを卒業すると、他の場所において新しいパサントゥレンを設立したりもする。このレベルのクラスに入ることは大変難しい。すなわち、能力だけではなく、それまでの行動、性格、考え方、強い精神力、社会の指導者たるべきカリスマ性などに加えて、大衆に良い習慣を示すことができるような人格も必要とされるからである²⁾。

一般にパサントゥレンの目的とするところは、宗教的な側面が非常に大きく、農業の方法・生活用具の作製というような技術に関するものは極めて少ない。長期間にわたり、このパサントゥレンは続いてきたが、社会的に地位の高い人々が、パサントゥレンとその教育のシステムを支えてきた。その結果、パサントゥレンは政府が設置した一般の学校と同じような位置を占めることになった。

しかしながら、17世紀初頭、インドネシアがオランダの植民地になると、オランダの政策のもとで、このパサントゥレンという教育のシステムは徐々に減少してゆくことになった。なぜならオランダは決して善意ではなかったからである。しかし、このパサントゥレンは存続しつづけた。約350年にわたって、インドネシアはオランダの植

民地であった。この期間の教育は決して発展的ではなかった。それはインドネシアにおいては悲しい時代であり、悲劇的できごとであった。オランダはインドネシアに対して、いわゆる分割統治（オランダ語で、Devide et Impera）を行い、インドネシアの文化を破壊した。オランダはインドネシアの伝統的な民族社会を否定した。そして極く一部のの人々だけが、オランダの植民地政策に同調し、高い地位を得て、オランダ人とともに活動した。

パサントゥレンはオランダの植民地主義に対抗する強い力とはならなかった。ジャワ人、スマトラ人、カリマンタン人などというように民族を分断するオランダの政策は、これまでのインドネシアの歴史にはなかったものであり、教育の状況は徐々に悪化していった。20世紀初頭になるとオランダの植民地政策は変化し、オランダ人とインドネシア人を同じレベルにおくことに示されるような、オランダとインドネシアの民族との融和政策をとるようになった。その結果、教育が拡大し、大学生を中心として独立の要求が高まった。そして第二次世界大戦以前には、しばしば暴動がおこった。インドネシアにおけるオランダの植民地政府は日本軍によって倒された。そしてインドネシアの人々は、他の国々と同じように自由と独立を要求した。独立宣言も秘密裡につくられた。第二次世界大戦の間に、オランダの植民地政府は日本軍に敗退し、このときが独立宣言をするチャンスであった。しかしながら諸般の事情から独立宣言はなされなかった。しかし独立と自由への戦いは、依然として続いた。第二次世界大戦が終り、1945年8月17日にインドネシア共和国として独立が達成されたが、各所で混乱があった。教育はすぐには元に戻らなかった。なぜなら各地の混乱がすぐには収まらなかったからである。とはいえ、350年間にわたるオランダの圧迫から解き放たれて、教育などが変革されるべき最も良いチャンスであった。

植民地時代に、オランダはオランダ人が必要とする学校をつくった。この学校（6年制）はオランダ人の子弟とインドネシアのエリートの子弟にだけ開かれていた。植民地時代のインドネシアで

は、民族にとっては3年制の学校しかなかった。そのうえ、学校は都市だけに存在し、村落（カンボン）にはなかった。そして、インドネシアの民族に対して、オランダの植民地政府は、常に分割統治を実施したけれども、インドネシアの民族のエリートの学校（6年制）も一般の人々の学校（3年制）も、インドネシアの独立まで存続した。

以上、インドネシアの教育の史的バックグラウンドについて、きわめて基本的なものについてだけ、非常に簡単にみてきた。それはまた独立以前のインドネシアの教育や学校の状況を若干説明したにすぎない。以下では現在のインドネシアの教育システムについて述べることにする。

Ⅲ. 教育の目的と学制

インドネシアにおける教育の目的というのは、国家としてのインドネシアのフィロソフィーと密接に関連している。このことはインドネシアの独立宣言にも載っている。すなわち以下のようなものである。

① 教育の基本はパンチャシラ (Pancasila)³⁾にある。パンチャシラとは基本的に、インドネシアの国民によって生活の規範となるものである。すなわち

- a) 全能の神への信心
- b) 人間性
- c) ナショナルリティ
- d) 議会制民主主義
- e) 全ての国民の平等・平和

② 1945年憲法。

この2つのポイントは、教育を含めて全ての活動に重要なものである。教育の目的は、国家のめざす方向と密接に関連するものでなければならない。そしてその内容は「威信を持ち、自分自身と国家に対する義務を果たす国民をつくることである。さらに国家、パンチャシラそして1945年憲法に深く献身する国民をつくる。」ことである。このような目的を実現するために、教育のカリキュラムが組まれている。

図1は幼稚園から大学まで（一部には私立学校もある）のインドネシアの教育システムを示したものである。インドネシアには教育・文化省 (the

図1 教育・文化省の管轄下にある学校のシステム

Ministry of Education and Culture) の管轄する学校だけではなく、宗教省 (the Ministry of Religion Affairs) の統轄する学校がある(図2)。

上記の2つの学校のシステムとも、児童・生徒の年齢制限は同じである。インドネシアにおける義務教育レベルの子どもたちは、まず小学校に入学する。それ以前の幼稚園児の年齢の制限は、5

～6歳である。教育・文化省、宗教省の統轄する学校のシステムには共に幼稚園があるがその数は少ない。この幼稚園はほとんどが私立である。

教育・文化省の管轄する学校のシステムにも、宗教省の管轄する学校のシステムにも小学校があるが、小学校に在学する児童の年齢は、一般的には7～12歳である。小学校のほとんどは、教育・

図2 宗教省の管轄下にある学校のシステム

文化省の管轄下のものであるが、宗教省の管轄下にある小学校もあるわけで、その両方に私立の小学校がある。

中学校も基本的には、小学校と同じ管轄の割合になっているが、小学校よりは私立学校の割合が高い。中学校に存学する生徒の年齢は13～15歳である。中学校までのレベルでは、子どもたちは教

育・文化省と宗教省のどちらに属する学校についても、同じような内容の教育を受ける。しかしながら、宗教省の管轄下にある学校の教育には宗教的側面が多くなっている。この場合でも、授業の内容そのものは、教育・文化省の定めたカリキュラムに基づいたものである。

高校においては、共通科目があるが、全科目の

2分の1程度は選択別となっている。教育・文化省の管轄下の学校でも、宗教省の管轄下の学校でも、大学進学をめざす生徒は、普通高校に進む。普通高校は3年制で、それぞれの学年は前期と後期の2期に分かれている。1年生の前期は全員が同じ内容の教育を受ける。後期には、1) 理数科コース、2) 社会科コース、そして、3) 言語と文化コースのどれかを選択する(後述、表3)。

普通高校でも職業高校(商業、家政、農業、工業、舞踏、手芸などの高校がある)でも卒業試験⁴⁾が全国で実施される。職業高校の生徒は卒業すると就職するが、大学に進学しようとする場合でも、2年間は自分の学んだコースの仕事に就かなければならない。その後大学の入学試験を受ける。しかし職業高校の卒業生の進学には次のような途もある。

a) 普通高校の3年生に編入して、1年間学ぶ。この方法は大変困難がともなう。なぜなら、仕事をしながらであるから evening course⁵⁾をとらざるをえないからである。

b) 私立大学の evening course (大体17時～21時) 又は night course (大体20時以降に開講し23時まで) に入ること。

高校と同じレベルに、就学年限3年の師範学校(Teacher's High School)があり、この卒業生は小学校の教師になる。しかしさらに学業をつづきたい学生は教員養成大学(University of Teacher Education)⁶⁾へ進む。

宗教省の管轄下にある高校には2つの機能がある。つまり、①小学校で宗教の時間⁷⁾を担当する教員の養成、②普通の高校教育、である。この高校につづく大学は、主として宗教を中心とする教育を行う。

次に高校につづく大学レベルの教育について述べることにする。

a) College (インドネシアではアカデミ Akadem という): この就業年限は3カ年で、卒業すると、Bachelor of Art (B. A.) の称号が与えられる。しかしこの卒業生は Pasca Degree や Doctor Degree のコースに進学できない。

b) University (インドネシアではユニベルシ

タス Universitas という): 大学には2つのシステムがある。文学・法学・経済学・地理学などの non-exact subject のコースは4年間であるが、医学・薬学・工学などの exact subject のコースは5年間である。この2つのコースの学生ともに、3カ年を終えたところで、全国共通の試験があり、パスすると B. A. の称号が得られる。失敗しても上級学年に進み、さらに B. A. の試験を受ける。この B. A. の試験に3回失敗すると (non-exact subject は2回)、自動的に大学の卒業年限が来てしまう。こうした学生は大学の卒業は認められないが、B. A. の称号は与えられる。

B. A. の試験にパスしたあと、non-exact コースはさらに1年間、exact コースはさらに2年間在学する。両者ともに全国共通の卒業試験が課せられる。この試験にパスすると non-exact コースの学生には、DRS (ドクトランドス Doctorandus), exact コースの学生には IR (インシニョール Insinyur) の称号が与えられるが、医学部の卒業生にだけは DR⁸⁾ (ドクター Doctor) と表現する。

以上の大学のシステムは、宗教省の管轄下の大学も全く同じシステムになっている。

教員養成大学(University of Teacher Education) は特別のシステムになっている。

1. D₁ プログラム: 就業は1年間で、卒業後は小学校の教員になる。給与の面では師範学校の卒業生よりランクがひとつ高い。すなわち D₁ プログラムの卒業生は師範学校の卒業生より高い教育技術を持っているとみなされる。
2. D₂ プログラム: 2年間就学し、中学校の教師を養成する。給与は D₁ と同じレベルである。
3. D₃ プログラム: 就学は3年間であり、高校の教員を養成する。3カ年の就学期間を終えても、B. A. の称号は与えられな

い。すなわち、ポジションとしては B. A. の下にランクされるが、給与は B. A. と同じレベルである。

4. S₁ プログラム：これは教員養成大学の最高学年で、これを修了すると、マスター Master の称号が与えられる。これは前述の DRS に相当する。このコースを終えて、さらに希望する学生は、入学試験を受けて、Pasca Degree, Doctor Degree にも進学できる。

このほか、2年間の技術大学 (Technical College)、また身体にハンディキャップのある学生のために設けられているスコラ＝ルアルビアサ (Miscellaneous School) がある。さらに中学校の上に、大企業が設けている Job Training School (就業は1カ年) がある。これはもちろん企業のための教育機関である。Special Training School は能力のある技術者をつくるために、政府又は企業が設置している就業期間2カ年の学校である。ここでは看護婦、簿記などの教育が行われる。この学生は仕事に就きながら政府又は企業などのスポンサーからの奨学金が得られる。

現在までのところ、インドネシアにおける高等教育のトップは2年間のパスカコースと、3年または3年以上のドクターコースになっている。

Ⅳ. カリキュラムの内容

1945年の独立後、インドネシアの教育・文化省は、徐々にカリキュラムを改訂していった。独立以前には植民地時代の政府の下で、1932年にカリキュラムがつくられた。しかし本稿では1975年から実施されている最も新しいカリキュラムについて述べることにする。

教育に関する諸活動の内容は、Instruction System Development Procedure にまとめられている。これには、教育の段階、学習の目的、児童・生徒と教師の教育活動、教科書などの教材、視聴覚教材・教具、評価などが含まれている。さらに授業の分野、大まかな教育の内容と方法、教授法も含まれ、さらに生徒への指導やカウンセリングも重要であるためにこれに含まれている。

1. 小学校 (6年制)⁹⁾ の教育内容

小学校には general programme, field of study programme (中学校では academic という) そして skill practice programme の3分野の教育がある。

小学校は3学期制で、1学期は4カ月間である。1・2年生は毎週26時間の授業があり、1授業時間は30分である。3年生以上は毎週33時間あり、1授業時間は40分である。

- 1年・2年生の主な教育内容・総授業時間の内訳は次のようである。

55%——言語 (共通語であるインドネシア語と自分の使っている地方語) および数学

10%——宗教とパンチャシラ

35%——その他の科目

- 3年・4年生の主な教育内容・総授業時間の内訳は次のようである。

35%——インドネシア語の書き方、読み方および数学

10%——宗教とパンチャシラ

35%——社会科および国民としての教育

20%——その他の科目

- 5年・6年生の主な教育内容

20%——言語

表1 小学校の科目と授業時間数 (週)

科 目	学 年					
	I	II	III	IV	V	VI
宗 教	2	2	2	3	3	3
パンチャシラ	2	2	2	2	2	2
インドネシア語	8	8	8	8	8	8
社 会 科	—	—	2	2	2	2
理 科	2	2	3	4	4	4
算 数	6	6	6	6	6	6
体 育	2	2	3	3	3	3
美 術	2	2	3	4	4	4
技 術	2	2	4	4	4	4
計	26	26	33	33	36	36

注) 上記の表のほかに、全クラスに毎週2時間の地方語の時間がある。

資料: The Ministry of Education and Culture (1975), The 1975 Curriculum for The Elementary School.

表2 中学校の科目と授業時間数（週）

科	目	学 年					
		I		II		III	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
宗	教	2	2	2	2	2	2
パ	ン	2	2	2	2	2	2
チ	ャ						
シ	ン						
ラ							
体	育	3	3	3	3	3	3
音	楽	2	2	2	2	2	2
イ	ン	5	5	5	5	4	4
ド	ネ						
ネ	シ						
シ	ア						
語		5	5	5	5	4	4
地	方	(2)	(2)	(2)	(2)	—	—
英	語	4	4	4	4	4	4
社	会	4	4	4	4	4	4
数	学	5	5	5	5	5	5
理	科	4	4	4	4	5	5
必修の		6	—	6	—	6	—
skill practice programme							
受講が望ましい		—	6	—	6	—	6
skill practice programme							

（ ）は必要と認めれば実施することができる

資料：The Ministry of Education and Culture (1975), The 1975 Curriculum for The Junior High School.

10%——国民としての教育

10%——パンチャシラを含む社会科

10%——宗教

12%——絵画を含む技術教育

20%——数学

18%——その他の科目

・家政 ・手芸

b) 必修ではないが受講させることが望ましいもの

・自然の観察と研究 ・討論 ・体育

・音楽 ・体育関係のクラブ活動

表2には中学校の授業科目と毎週の時間数を示した。

表1には小学校の授業科目と毎週の時間数を示した。

2. 中学校の教育内容

中学校には以下に示すようなプログラムと教科がある。

A : general education programme

・宗教 ・パンチャシラ ・体育 ・美術

B : academic programme

・インドネシア語 ・地方語 ・英語
・社会科 ・数学 ・理科

C : skill practice programme

a) 必修

・社会教育 ・技術 ・料理 ・機械修理
などの“サービス” ・農業 ・海洋

3. 高等学校の教育内容

高校には以下に示すようなプログラムと教科がある（表3）。

A : general education programme

・宗教 ・パンチャシラ ・体育 ・音楽および美術

B : academic education programme

a) 1年生前期

・数学 ・インドネシア語 ・英語
・理科 ・社会

b) 1年生後期以降

・数学 ・インドネシア語 ・英語

1年生の後期以降は上記のほか次の3つのコースに分かれる。

表3 高校のプログラム、コース別科目と授業時間数(週)

プログラム	科 目	共通	Natural Science 理数科コース					Social Studies 社会科コース					Language and Culture 言語と文化コース				
		I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
General Education	宗 教 教 育	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	パンチャシラ	2	2	2	2	—	—	2	2	2	—	—	2	2	2	—	—
	体 育	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	音 楽	2	2	2	2	—	—	2	2	2	—	—	2	2	2	—	—
Academic Education	数 学	6	6	6	5	5	5	3	3	3	3	3	2	2	2	—	—
	インドネシア語	5	4	3	3	3	3	3	3	3	4	4	6	6	6	7	7
	英 語	4	4	3	3	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	社 会	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	物 理	7	2	3	3	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	化 学	—	2	3	3	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	生 物	—	2	2	3	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	商 業・貿 易	—	—	—	—	—	—	4	4	4	6	6	—	—	—	—	—
	経済・協同組合	—	—	—	—	—	—	2	4	4	4	4	—	—	—	—	—
	歴 史	—	—	—	—	—	—	4	3	3	—	—	—	—	—	—	5
	地 理	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	3	—	—	—	—	—
	地 理・人類学	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	2	2	—	—
	外国語（日，独， 仏，蘭語から1 つ選択）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	2	4	4
	地 方 語	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	2	—	—
選 択*	—	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
Skill Practice Education	職 業 技 術	—	4	4	4	—	—	4	4	4	—	—	4	4	4	—	—
	選 択**	—	3	3	3	7	7	3	3	3	7	7	3	3	3	7	7
総 授 業 時 間 数（週）		37	37	37	37	36	36	37	37	37	36	36	37	37	37	36	36
科 目 数		9	13	13	13	10	10	13	13	13	10	10	13	13	13	8	8

注)

- *印：理数科コースは、絵画・製図、天文学、外国語（日，独，仏，蘭から1つ選択）から1科目，社会科コースは絵画・製図，物理，外国語から1科目，言語と文化コースは絵画・製図，社会科，外国語からそれぞれ1科目を選択する。外国語は会話が中心となる。
- **印：農業，漁業（内水面），漁業を含めた海洋，家政，技術，貿易，美術の7分野から3つを選択する。
- 各コースの下のローマ数字は，学期を表わす。すなわち，Ⅰ・Ⅱは1年生，Ⅲ・Ⅳは2年，Ⅴ・Ⅵは3年生である。

資料：The Ministry of Education and Culture (1975), The 1975 Curriculum for High School.

- 理数科コース——物理，化学，生物
- 社会科コース——商業・簿記，経済，協同組合のシステム，歴史，地理
- 言語と文化コース——英語および2～3カ国語。このコースでは言語だけでなく，歴史・地理，

人類学および地方の言語を学ぶ。

C : skill practice education programme

- ・自然について観察と研究，地理のフィールドワーク，外国語の実習
- ・上の科目を1学期にひとつずつ受講するが，時間が足りない場合には次の学期にも続ける。

高校では第Ⅰ，Ⅱ，ⅢおよびⅣ学期が毎週37時

間、ⅤおよびⅥ学期が36時間の授業時間である。一般に生徒は理科コースを取ることが望まれている。なぜなら自然科学の科目は必ず大学にもあり、研究を深められるからである。

Ⅴ. 1975年カリキュラムにおける社会科

インドネシアにおける教育のカリキュラムは何度か改訂されてきた。教科のシステムやカリキュラムの内容も変化し、不安定なものであった。しかし、徐々に教育・文化省によって直接に望ましい教育とそのカリキュラムがつくられつつある。

1. 小学校の社会科

小学校の社会科は、教育・文化省の管轄下の学校でも、宗教省管轄下の学校でも同じカリキュラムである。小学校1・2年における社会科は、学校の周辺、自分の家の周り、公園等にある植物や植栽、水田、動物等々、身近な地域の学習が大きな割合を占める。

3・4年生は次のような内容になっている。

- 歴史上有名なことや物語を扱いながら、良い能力を持った子どもを育成する。
- 子どもたちの住む地域の村について知る。
- 農村と都市について比較する。
- 人間として生きてゆくために有用である太陽、月、星、気候、風などについての知識を得させる。

5・6年生の社会科には、特に地理が取りあげられている。その内容は次のようなものである。

- インドネシア全図、海と島、国境、湾、山地と川など
- 県、大都市、地方と町など
- 工業地域や農業地域に関する簡単な経済地理的視点
- 地図づくり
- インドネシア地図帳と世界の地図帳
- 近隣諸国
- 世界の各地域
- 外国の国々の経済収支
- 学習のための旅行
- 人口

2. 中学校の社会科

中学校における社会科の目標は次のようなものである。

- a) 自分の住んでいる地方や歴史上の国々などについて学ぶ。
- b) 他の国々と関係させながら、さらにインドネシアの歴史を学ぶ。
- c) よい国民として持つべきナショナリズム、愛国心を含めて、インドネシアの文化を知る。
- d) インドネシアの地理を学習し、自分の国の位置を知る。
- e) インドネシアの経済の知識を得て、さらに発展しつづける経済を打ちたてることに参加できる生徒をつくる。
- f) 国土、水そして様々の資源への理解を深め、インドネシアの国民や国家のための利用を考える。
- g) 人口の増加と減少の持つ意味を考え、高い人口増加率の影響を理解する。
- h) 社会、経済、文化、政治などの面から、国連を含めて世界各国とインドネシアの国際関係を理解する。

以上が中学校の社会科の目標であるが、その具体的内容は次の通りである。

- インドネシアの人々による反植民地闘争
- インドネシアの独立戦争
- インドネシアの歴史
- 国民の生活に対する独立宣言の意味
- ビネカ=トゥンガ=イカ (Bhineka Tunggal Ika) (様々な民族をひとつのインドネシアにすること)
- インドネシアの若い人々の行動規範
- インドネシア語がナショナリズムをつくる道具のひとつであるということ。
- 地方毎の文化
- インドネシア諸島
- 各地方における自然の特色
- 生産物
- インドネシアの経済の原則と経済動向
- 生産と配置
- 経済における金融

- インドネシアの経済システムにおける協同組合のシステム
- 地域開発政策
- 生活協同組合のシステム
- インドネシアの資源
- 国民の出生と死亡率
- 人口
- 人間と生産性
- 適性人口
- 家族計画
- 移住，入植，都市化とインドネシア人の拡大
- ASEAN におけるインドネシアの地位と機能
- 世界史からみたインドネシア史
- 国際関係
- 国際連合

3. 高校の社会科

高校における社会科の目標は次のようになっている。

- a) 独立に向けての各地域の闘争を学び，さらに国家の歴史を学ぶ。
- b) 他の国々との関連において，インドネシアの歴史を学び，さらに広い視野から国際関係におけるインドネシアの地位を知る。
- c) インドネシア国民としてのナショナリティやナショナリズムを持つことができるように，国内の様々な地域の伝統的文化を深く理解させる。
- d) インドネシアの地理的状况を知り，資源の有効な利用を考え，さらに他の地域の人々と自分たちの生活が密接に結びついていることを知る。
- e) 家庭の生活を基礎としたインドネシア経済のしくみを理解し，インドネシア経済の発展に，各人が参加できることを理解させる。
- f) インドネシアとその国民の繁栄と安全にとって非常に重要である国土，水そして資源についてははっきりとした認識を持たせる。
- g) 拡大してきた人口問題について，はっきりとした認識を深め，バース・コントロールに

ついで政府の政策を理解させる。

- h) 経済や文化の分野において，他の国々とインドネシアの間の協同の政策を理解させ，インドネシア国民の安全に対する認識を深める。

高校における社会科の具体的内容は次の通りである。

- 政治や文化などの視点で，紀元前から1908年までのインドネシアの歴史
- 1908年以降のインドネシアの歴史
- 古代から第二次世界大戦までの世界史
- 世界史とインドネシア史の関連
- インドネシアの文化
- インドネシア国民の活動
- 文化と文明の関連
- 地理的環境
- 資源の利用
- 基本的な経済理論
- 消費と生産および配置
- 世界における経済体制
- インドネシアの経済体制と経済政策
- 町における住民協力のシステム¹⁰⁾（となりぐみ）
- 金融，クレジットおよび銀行
- 価格，価値および市場
- 政府の経済政策
- 経済的な発展
- 国家の発展
- 地域開発政策
- 国勢調査
- 居住の形態
- 人口増加の問題と産児制限

上記のような内容をより深く理解するために，特に中学校，高校の生徒には研究旅行があり，フィールドワークに基づいたレポートが課せられることになっている。小学生には特にレポートを作成させることにはなっていないが，周辺地域をよりよく理解させるための巡検を実施することになっている。このような活動は，一般に学期が終了した後の休暇の間に実施される。そしてこれには，グループで実施する場合，学校全体で行う場合さらに各生徒が自由に出かける場合などがある。こ

のような活動はすでに1975年のカリキュラムの改訂以前に実施されていたが、1975年のカリキュラムで手直しされた。

Ⅵ. むすびにかえて

本稿では、インドネシアの教育システムと社会科学の内容を日本に紹介することを目的としたが、その主要な内容を列挙すれば、次のようになる。

1. インドネシアにおける望ましい教育システムは、1950年の独立後にスタートした。

2. インドネシアにおける教育の基本は、パンチャシラと1945年憲法にある。

3. 学校のシステムは、インドネシア教育・文化省の管轄下の学校と宗教省の管轄下の学校の2種がある。

4. 現在、インドネシアにおける教育は、1975年のカリキュラムにおいて実施されている。

5. 幼稚園と小学校は年3学期制（1学期は4カ月）をとっており、それはチャトウル＝ウラン（Catur wulan）と呼ばれる。中学校から大学までは2期制である。

6. いわゆる社会科学という分野には、地理、歴史、経済そして人類学が含まれる。

7. 社会科学における教育は、いわゆる教室における授業に加えて、フィールドワークも重視されている。

なお、インドネシアにおける児童・生徒の休暇は次のようになっている。すなわち、幼稚園と小学校は各学期のあと1週間、学年末には2週間の休みがある。またラマダンの月に2週間の休暇がある。中学校・高校は前期終了後1週間、学年末に2週間、ラマダンの月に2週間の休暇がある。

参考文献

- ・インドネシア教育・文化省（1975）：The 1975 Curriculum for Kindergarten, pp. 75～84.
- ・インドネシア教育・文化省（1975）：The 1975 Curriculum for the Elementary School, pp. 84～87.
- ・インドネシア教育・文化省（1975）：The 1975 Curriculum for Junior High School, pp. 87～98.
- ・Beebe, M. (1976) : Education System in Indonesia, インドネシア教育・文化省, pp. 10～15.

- ・インドネシア外務省（1975）：Pancasila Morality and 1945 Constitution of Republic of Indonesia, pp. 23～32.

注)

- 1) 一般のスクール＝システム以外にこのパサントゥレンがあり、子どもたちは一般の学校へ通うと同時に、午後にこのパサントゥレンにも通うことが多い。しかしこのパサントゥレンは義務ではない。
- 2) the basic level には、通常小学校の3年生くらいから入る。5～6年生くらいで、second level に進み、upper level には中学1年～3年生くらいが在籍する。普通の子どもはupper level までであるが、イスラム教の僧になることを希望する場合は、さらに top level に進む。top level はイスラム教について専門的に学び、このレベルを終えると、彼らはムラのリーダーとなり、パサントゥレンを運営するようになる。
- 3) インドネシア語で「5原則」という意味。
- 4) インドネシアには小学校でも、教育・文化省の作成する全国共通の卒業試験がある。中学校・高校の入学・卒業試験、国立の各大学の入学試験も同様である。
- 5) 高校にはほとんど、day course（大体7時30分～12時30分）、evening course（大体14時～19時）がある。つまり同じ校舎を2回利用するが、教師は2つのグループに分かれている。小・中学校にも一般に day course と evening course の2コースがある。これにさらに morning course のあるところもある。
- 6) 国立としては全国10カ所にある。
- 7) 全国の全ての小・中・高校に毎週2時間の宗教の時間がある。
- 8) DR と略するのは博士号で、医学部の卒業生はDr と略する。
- 9) インドネシアでは、1984年から、小学校の6年間が義務教育となった。また新学期は7月に始まる。
- 10) これは第二次世界大戦中に日本軍の指導によってつくられたものであるが、この制度は戦後も残って活用されている。

脚注は訳出の途中で生じた疑問に、筆者が訳者に答えたものである。訳出についての誤りがあるとすれば、その責任はすべて訳者にある。なお、カリキュラムの具体的内容を列挙したところなどは、グルーピングの必要性を感じたが原著のままとした。（白坂 記）

（ジュハナ スピリアディ マリアディナタ：東京学芸大学大学院修士課程在学
白坂 蕃：東京学芸大学助教授）

THE GENERAL VIEW ON EDUCATION SYSTEM AND SOCIAL STUDIES IN REPUBLIC OF INDONESIA

Juhana Supriadi Mariadinata

After the independence day August 17, 1945, education system of Indonesia was not established because of the confusion in economic and political problems. However, step by step the Government made the policy for developing national education.

The first curriculum was not developed in 1956 and then renewed in the year of 1963 and 1968. Recently we have the new one, developed in 1975.

By the way, we had the education system since the Hindu culture entered Indonesian society, and the Hindu religion penetrated, so the education activities were usually held at the Hindu temples, which we called *Padepokan* (about 700 BC).

After the Islamic religion came on, we had Pesantren system for the Muslim who want to study deeply about Islamic religion, and the center of the education activities were in the mosks. This Pesantren was opened after about the 15th century.

During the Dutch colonial days, the national education was not developed, but Pesantren education system were continued.

Since the year of 1908, the Dutch colonial government opened schools for both their children and the common people. Therefore the people who entered schools were not many. After 1928, schools belonged to the educated-class and it was more necessary to develop and spread education among all the common people in the Indonesian archipelago.

Today, we have two school systems for the same purpose, but they different in responsibility and management administration. One is organization of school system under responsibility of the Ministry of Education and Culture, and other under responsibility of the Ministry of Religion Affairs.

Generally speaking, the education of Social Studies field in Indonesia has been using this system since the 1975 Curriculum was established. However, before using this system, for example in the 1963 Curriculum, we used many different kinds of courses for learned Social Studies. For example; History, Economy, Cooperation system, Geography, Sociology, etc, were established as one field to study.

Since the 1975 Curriculum, the system has been changed as following:

1. For the Elementary Schools and Lower Secondary Schools, we teach Social Studies above mentioned.
2. For the Upper Secondary Schools and up we use continuing system like the 1968 Curriculum.

And basic purpose of national education is PANCASILA which is the 1945 Constitution as the declaration of the independence of Republic of Indonesia.